

中津藩

関ヶ原の論功の結果、黒田家が筑前福岡に移り、そのあとに丹後宮津にあった細川忠興が豊前中津に入って、豊前一国と豊後の一部30万石を得て、中津を城地としたが、のち小倉へ城地を移す。

中津は小倉藩領となるが、細川忠興が幕閣に運動して一国一城令の例外として中津城の存続を許可され、忠利に家督を譲ると、隠居城として、中津に入る。やがて、肥後熊本加藤家が改易になると、細川家は熊本へ移り、細川家の旧領には小笠原家一門四家を配置する。

豊前小倉には宗家として、小笠原秀政の二男小笠原忠真が播磨明石から15万石で。

豊前中津には播磨竜野から小笠原秀政の亡くなった長男忠脩の子小笠原長次が8万石で。

豊後杵築には小笠原秀政の三男小笠原忠知が。

豊前竜王には小笠原秀政の四男で、能見松平家に入っていた松平(能見)重忠が入る。

小笠原秀政と長男の小笠原忠脩は大坂の陣で奮戦死しているため、中津は孫の長次だが、豊前一国を小笠原秀政の子の四兄弟の家で領することになったのである。

小笠原長次は小笠原秀政の嫡孫ではあるが、祖父と父が戦死したとき、幼少だったので、秀忠の命で小笠原宗家は叔父の忠真が継ぐこととなった。

小笠原長胤は苛政と乱行を咎められ、一旦領地没収、弟の長円に半知4万石が与えられた。

さらに次ぎの小笠原長邑が6歳で夭折し、本来なら絶家のところ、家柄を鑑み、弟の長興に1万石ながら、播磨安志が与えられ、名跡は繋ぐことが許された。

替わって、丹後宮津から奥平昌成が10万石で入る。奥平家九代を継いで、維新に至る。

歴代藩主

細川家

慶長5(1600)～寛永9(1632)

丹後宮津より 30万石

外様 国主

豊前一国と豊後国2郡(国東 速見)39万9,000石(1説には32万石)

	藩主	官位・通称	出自(実父・嫡出関係)
初代	細川忠興(ただおき)	従三位 越中守 左近衛少将 参議	細川藤孝の長男

豊前 小倉へ

小笠原家

寛永9(1632)～享保元年(1716)

播磨竜野より 8万石→4万石

譜代 帝鑑間 城主

8万石の領知構成は下毛郡82か村3万19,67石、上毛郡19か村6,647石、宇佐郡124か村4万1,385石である。

	藩主	官位・通称	出自(実父・嫡出関係)
初代	小笠原長次(ながつぐ)	従五位下 信濃守	信濃松本藩主小笠原忠脩の長男
二代	小笠原長勝(ながかつ)	従五位下 信濃守	小笠原長次の二男
三代	小笠原長胤(ながたね)	従五位下 修理大夫	小笠原長次の長男小笠原長章の長男
四代	小笠原長円(ながのぶ)	従五位下 信濃守	小笠原長章の五男
五代	小笠原長邑(ながさと)	なし	小笠原長円の長男

無嗣改易のところ、小笠原長興に名跡、播磨安志へ

奥平家

享保2年(1717)～明治4年(1871)

丹後宮津より 10万石

譜代 帝鑑間 城主

10万石の領知構成は、豊前上毛郡19か村7,089石、下毛郡61か村2万4,144石、宇佐郡84か村3万841石、豊前領は、城附4万石と宇佐郡の添地とにわけられている。筑前国 怡土(いと)郡29か村1万7,908石、備後国甲怒、神石、安那郡36か村2万15石で、大分、福岡、広島にまたがっている。そのため「三御領」といわれている。

	藩主	官位・通称	出自(実父・嫡出関係)
初代	奥平昌成(まさしげ)	従四位下 大膳大夫	下野宇都宮藩主奥平昌章の二男
二代	奥平昌敦(まさあつ)	従五位下 大膳大夫	奥平昌成の二男
三代	奥平昌鹿(まさか)	従五位下 大膳大夫	奥平昌敦の長男
四代	奥平昌男(まさお)	従五位下 大膳大夫	奥平昌鹿の長男
五代	奥平昌高(まさたか)	従四位下 大膳大夫	薩摩鹿兒島藩主島津重豪の二男
六代	奥平昌暢(まさのぶ)	従四位下 大膳大夫	奥平昌章の二男
七代	奥平昌猷(まさみち)	従四位下 大膳大夫	奥平昌高の五男
八代	奥平昌服(まさもと)	従五位下 大膳大夫	奥平昌暢の二男
九代	奥平昌邁(まさゆき)	従五位下 美作守	伊予宇和島藩主伊達宗城の三男